目標100万円

CFで遠征費募る

ミャンマーから柔道発祥の地日本へ

講道館を訪問、延岡で練習

ミャンマーのマンダレー体育学校で柔道コーチをしている蛭田義洋さん(30)が、将来、国の代表として活躍が期待される子どもたちに経験を積ませたいと、柔道発祥の地・日本(東京、延岡市)への遠征を計画した。現在、クラウドファンディング(CF)を活用して必要資金を募っている。

マンダレー体育学校は、スポーツ選手や指導者の育成などを目的に設立された国立学校。現在、13～18歳の生徒が寮生活しながら22種目の競技に分かれてトレーニングに励む。蛭田さんは、国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊員として赴任している。

遠征は5月下旬から6月中の1週間程度を計画し、選抜選手6人とコーチ2人を参加させたい考え。東京では柔道の総本山である講道館の訪問、延岡市では地元中学生との合同練習や異文化交流などを予定している。CF目標額は100万円で、渡航費や宿泊費、食費の一部などに充てる。

延岡市とミャンマーは、2014年に同市内の企業有志が訪問したことを契機に経済交流が深化。その後も継続的な相互交流を積み重ね、その輪は観光やスポーツにも広がりを見せている。今回の延岡遠征も人的交流から生まれているという。

計画名は「憧れの日本で柔道を!ミャンマーの子どもたちの日本遠征への挑戦」。支援募集の期限は4月2日午後11時まで。きょう正午現在、50人から66万3000円(66・3%)が寄せられている。目標金額達成の場合のみの受け取りとなる。

支援コースと返礼品は▽3000円コース=サンクスメールなど▽5000円=生徒直筆の感謝の手紙▽1万▽3万円=遠征時の横断幕に名前、会社名掲載など▽5万円=同▽10万円=同。

蛭田さんは、経済的な理由から子どもたちの柔道環境は十分でなく、対外練習の機会も少ないことから、「国の代表選手を目指す子どもたちの夢の実現のため、成長できる経験を積ませてあげたい」と、協力を呼び掛けている。

CFサービス会社は「READYFOR」(https://readyfor.jp/projects/ispemdyjudo)。

練習に励む子どもたち

2020.3 17

解体作業前の後藤邸（写真は2月に開かれた「おくりいえ」から）

延岡市

後藤邸 部材を有効活用へ

歴史継承 適切な場所への利用検討

3/17

延岡市は、市役所西側の野口遵記念館建設予定地内にある1937（昭和12）年に建てられた近代和風建築「後藤邸」（同市東本小路）について、活用の可能性のある部材などを取り外した上で保管し、後に有効に活用する方法を検討する方針を決めた。

後藤邸は、シイタケ卸業や製糸工場、貸家業などを手掛けた「後藤作次郎商店」を営んだ故後藤作次郎氏が建てた住宅。延岡大空襲で多くの建物が焼失する中、奇跡的に戦火を免れた貴重な建築物で、82年間にわたり市中心部にシンボルとして存在した。

木造の入母屋造り2階建て「母屋」と二重屋根構造の「離れ」、その間を5間（約10メートル）の「廊下」がつなぐコの字型の建物、出窓ガラス障子や玄関のモザイクタイルなどモダンなデザインの内装も目を見張る建築物だが、記念館建設に伴い解体作業が始まっている。

後藤邸の保存・活用について、市は、①曳（ひき）家で建物すべてを保存②同手法で一部を保存③活用の可能性のある部材を有効活用―の三つの選択肢から検討。多額の事業費が見込まれることや、旭化成創立100周年事業の趣旨から記念館完成時期を遅らせることが難しいことから、③を選択した。

市は開会中の市議会3月定例会に提案した今年度一般会計3月補正に、後藤邸の歴史継承と城下町延岡の情報発信強化などへの活用検討を目的として、瓦や丸太桁、床柱、ガラス障子などの部材を取り外し、保管場所に運搬する経費176万円を計上し、可決された。

読谷山市長は「今後、野口遵記念館、城山公園、内藤記念館、県体育館の回遊性という視点も考えながら、適切な場所に後藤邸の材の一部を活用し、歴史を感じさせる古民家風のインフォメーションセンターや、くつろげる空間的な機能の設置などについて検討していきたい」としている。

後藤邸の保存・活用については、宮崎県建築士会延岡支部女性委員会が2月、解体を控えた同邸で「おくりいえ」イベントを開催。市民に後藤邸の歴史的・文化的価値をPRするとともに、市に最大限の活用などを要望する取り組みも行われていた。

2020.3.17